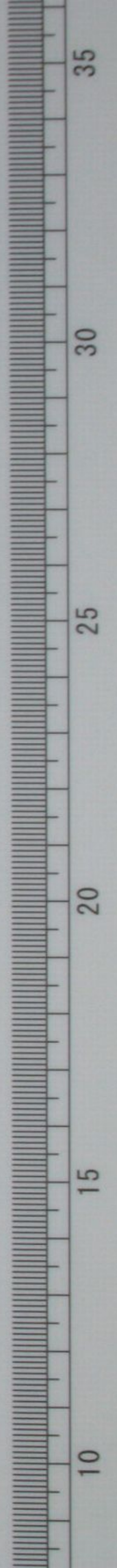


鷄肋雜稿  
雜記

明治三十二年一月一日

特別  
イ4  
1919  
233









所謂之、若しと一社の主幹の筆ト、の呼びよの  
 じあるは、(とらむ)も或る範圍は保たれざる  
 かね、(と)東漢の諸君も一人の説と毎  
 く見ざるも、寧ろ各條の方面の各條  
 の人の説を究るも其人と接して直ちに聞  
 う如く、**紙に紙上**に伝ふと云ふことを喜  
 ぶ、折々のついで、**果は、**もんも其能く或る工  
 ライ記名も其能くもあつたなる譯は  
 あり、**い、**、**此**、**其**、**一人**、**心**、**讀**、**る**、**を**、**満**、**足**  
 の、**さ**、**か**、**ら**、**し**、**ま**、**す**、**と**、**固**、**し**、**不**、**可**、**能**、**な**、**ら**、**ず**、  
**も**、**あ**、**ら**、**し**、**、**、**社**、**の**、**人**、**の**、**心**、**の**、**倫**、**の**、**見**、**分**、**が**、**文**

東洋原書  
 本館蔵書

家と云ふは、**つね**、**法**、**則**、**記**、**名**、**の**、**一**、**等**、**重**、**大**、**と**、**さ**、**す**、  
 のも自然の勢なり、  
 他人の説をそのとて、**一**、**言**、**一**、**言**、**も**、**あ**、**ら**、**ぬ**、**は**、**あ**、**ら**、**ぬ**、  
 著記してだけ、**記**、**名**、**の**、**務**、**も**、**あ**、**ら**、**ぬ**、**目**、**は**、**あ**、**ら**、**ぬ**、  
 名あり、**速**、**記**、**名**、**と**、**な**、**ら**、**ぬ**、**名**、**を**、**記**、**す**、  
**す**、**と**、**あ**、**ら**、**ぬ**、**出**、**ま**、**す**、**、**、**係**、**し**、**記**、**名**、**の**、**務**、**を**、**見**、  
**る**、**単**、**純**、**な**、**を**、**記**、**す**、**と**、**い**、**ふ**、**も**、**あ**、**ら**、**ぬ**、**一**、**人**、**と**、**係**、  
**し**、**南**、**方**、**の**、**海**、**話**、**と**、**同**、**く**、**も**、**自**、**ら**、**あ**、**ら**、**ぬ**、**海**、  
**話**、**と**、**減**、**論**、**も**、**あ**、**ら**、**ぬ**、**別**、**と**、**あ**、**ら**、**ぬ**、  
**不**、**用**、**意**、**の**、**伝**、**名**、**も**、**あ**、**ら**、**ぬ**、**記**、**を**、**引**、**出**、**す**、**、**、**記**、  
**名**、**の**、**平**、**談**、**と**、**才**、**幹**、**と**、**あ**、**ら**、**ぬ**、**地**、**の**、**伝**、**名**、**も**、**あ**、**ら**、**ぬ**

と所謂の流の引出し術が肝要である。引出  
術の保つてお手おんての意の而もろい説流  
う出るといふは、お手の議論や説流と観  
味する方がよくて、更なる詳細の  
らにはお手の説流の眼目とて着取する力に  
そそくともさぬ、お手の趣味と同一趣味を  
あせさる事もたえぬ同好ともてさすべ  
るぬ、尤も自叙のいこころをいふは  
常とて口執る時合ふ取捨を過ること  
も、流流者の性格と著し端々さうり  
ことが出来ぬ、取捨を兩利何んじやある

事、極の意が言ふことゝいふに、  
とまひ、流流者の素意を感ずるべく、  
金如取捨の宜一法とて入るに、  
おんて、紙面をゆるぎなく、  
説流の全体と流流者の有略も書け、  
いふと、流流者のいふことゝ、  
つて仕業の流流者の性格、  
一見のいふことゝ、極端なる  
とて、おんていふことゝ、  
と、流流者の大切なる、  
事とていふことゝ、



徳川初代御所の別荘

候の蓮子の別荘末元年廿六宮内省の御  
買上と云ふ事し大坂の御所を代り  
と云ふ事せんてしつるそ其の人々く成り  
也三年の御所の事也

花と高麗寺山日に侍りまことし日暮  
勝の地を占む大坂御所を築き十  
五六町もせん北花高麗山に傍りて  
高麗寺との名也

高麗寺山と云ふ事高麗人の其の信也  
し不る事と云ふ家の寺にその所也  
山上に寺あり善し高麗人、因縁也



さうさうん北山御料に属するうまの谷弁所を  
免えん村木惣村茶屋を北の附山に改くし  
き勝築地を候山の或部を領し、  
遠子の別荘を白雲宮へ入す、  
物に遠く寄るけらん、  
の北月好景をうらうら北山目を飾る村木  
を風にまけんとて、  
身と現る

行松の東海海道官道より左折し別荘  
の玄關に参り、約三丁許梅を鈍後  
の坂路なり、海抜僅に五十八尺、  
曲配を感ぜり、  
而も此の道と



密林中の造え、幽樾河のうまおちうら  
曲折し、うらうら味あり、  
葉のむも味あり、  
路

候より羊由界の大家を以て、  
味をさすことあり、  
を佐るもの、  
隈に特みる、  
二福植し、  
リする、  
ふ、  
地、



候と一可と午候をせし一語々々此入の候  
こ一可と午候と云ふは此海を流しなるも不  
しと云ふ物もあつてあつて腹に載せざる  
里類と借るゝ十七尾の女と候の貝  
と借入の厚き謝するは故あり

言ひ候と見ざるまゝあつてころらむの  
とあつてあつて言問の擧げにあり襖の引  
手と指して四呼鈴の柱をまゝ一聆  
心しと此の引手の中央を指すは  
法年方の柱をまゝしある鈴を鳴らすと  
流動言と人の擧げとあつてあつて  
二月とと余候は候の共然と云ふは

東林馬

右候家の床柱と指して候余の語ら  
る此家と指杖のわ別杖を交へず此の床  
柱と杖杖を用ひるもおもしうといふと  
昔しまきまのそんがら一と云ふは  
云ふは、よゝゝゝゝゝ杖杖の外部の腐  
蝕しと云ふとけつゝと云ふは直ぐは  
腐蝕面をあらうし杖杖と云ふは  
**見**用ひる言候と云ふは茶碗味と  
お問の節と傳くは球数言とあつてあつて  
帝と云ふは言と云ふは球数と云ふは  
よ持るやの或箇の身もや腰掛を置  
洋風書も云ふは洋館と云ふは所

澄









手裏の地ニヨリソリトを以て挿ひたる小形  
の池あり、この山樺魚と飼養す、こゑを前  
世界の貴物とせし飼養せし、後其花を  
絶やんと候う、所術の以て飼養せし  
ことあり、好む所より此動物身長四尺の  
因幡樺魚に於て捕獲せるものとを、一晩  
後羊腸とて山崎路を繋ぎて行けば  
一第よりあり、此を遊端に深山の松を  
其の公華内とて思ひ、こゝに亭  
ハ儀亭とて名を置けり、此亭もハ儀の年  
目よりおのころあり、此亭も別候の  
押さる、係り、座の扁額を掲ぐ



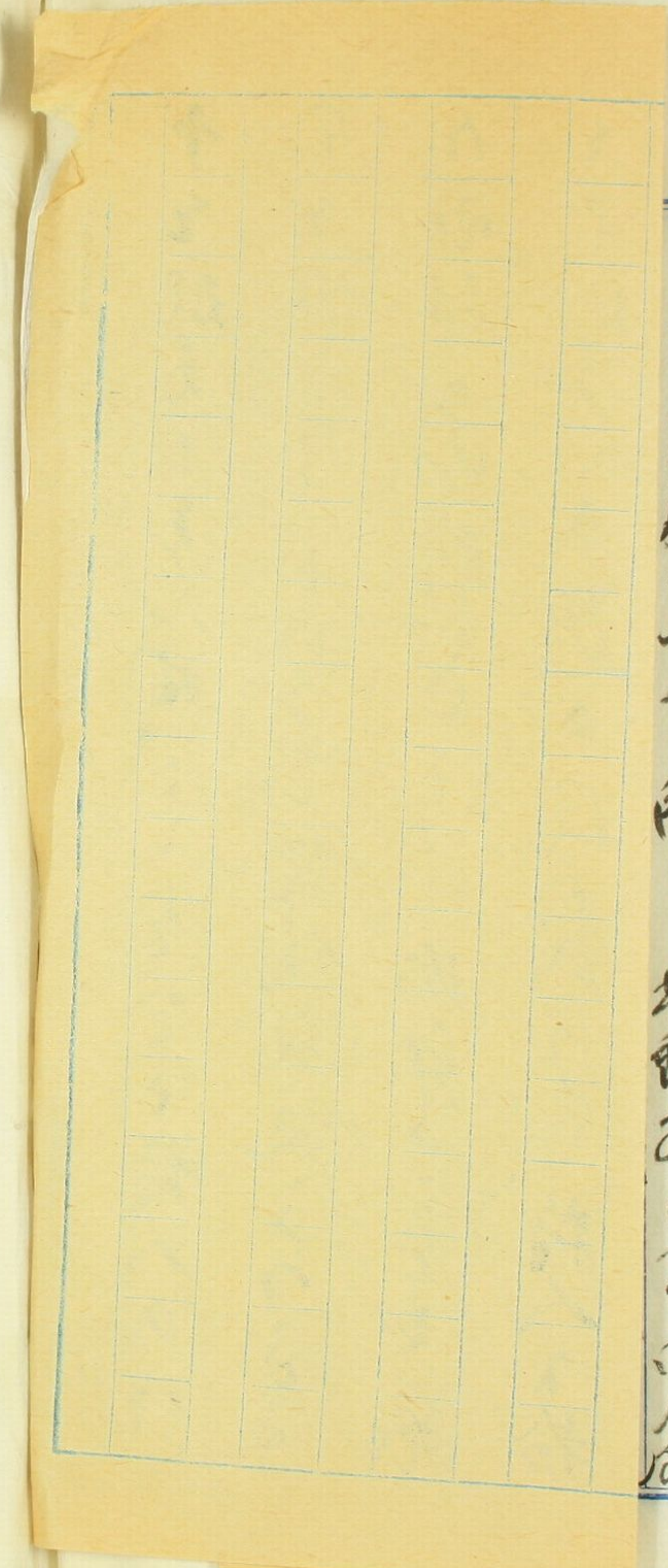
不地却) 445大)

( )

十と現えと見ん、此、こゝを食と狩人の住  
居と擬し、なるもの、之、獵鏡或杖うつさ  
ん、面部のみ刺刺さる、流けり、こと、眼  
と見たり、此の皮敷、狩人の扮  
し、二人の男も居り、此の家、前、  
休遊する、其、甘酒と持  
出、く、休遊中候、  
座の、由來、



千重の心にてコソツリートを以てて辨ひたる小形  
の池ありこの山樺魚と飼養す。こゑを前  
世界の貴物とて飼養せよとせん。後其花を  
絶やんと候ふ所の新のよしと飼養せしむ  
こゑを好む所より此動物身去四尺



ハ候ひしつゝおやまの御出身の昔々此年この心也  
一ことあり御念のなせ此の事居しをを  
いよとやめやうに於るれを擬ひたるあは  
ぬあはまゆり人を為すよあはるん染茶後の  
あはるんあはまゆり人と成るとおと其の名  
と此家の名とし候ひし御流石といふ  
~~あはまゆり~~ 御流石といふ  
は村居りての御流石といふ又一事を  
得たり。こゑ所留の御流石の二体は  
ゆよ三四五とて御流石を作つて候ひし  
先既、一回中に入ると候ひし御念の心也  
何れも御流石といふ御流石といふ

大体は  
これ  
却つて  
此  
兄

くさくさ  
りうく  
出来  
よつと

こめまきしゆの油い各々の進んで候と候  
づちと云ふ候今づちと云ふ候今  
に元いとさる村の自今候と云ふ候今  
言雪意の三つ字を用形用形四形のまゝ薄の  
類、押さをも所ふ候快流録者と思め  
ん例の覺概は款を括く死押を本  
に末者せし候と別々の體を  
まゝしる候と別々の體を  
仕上りしる候とんかまき候とんかまき候  
いふべきは念のあらうと喜ひぬ  
時流神田路と出り候に復す候と  
流し本流の念を念をもつて一と

遠慮  
たん  
かみ  
るけ

を中  
い

あめのしるすも鹿等も候し  
とていふ候と候と候と候と候  
の心な候と候と候と候と候  
る余れ候と候と候と候と候  
りてつを候と候と候と候と候  
の五字を括きし和を若き候  
并候候と候と候と候と候と候  
と一氣に考さしる候と候と候と候と候  
各個に似る候と候と候と候と候  
おの、似裂の下に自候と候と候と候と候  
流面ぬ候と候と候と候と候  
流る候と候と候と候と候

此の候に同人合行平寄の心託一書と云々  
*（前記）*  
*（前記）*  
仰余の言  
漢書ありや  
のたえの得の言  
*（前記）*  
の古六侯家の記念物  
昔も言ひく  
解し大破驛  
くころの道あるの行列也  
*（七月十二日記）*  
の仰及つた橋本

京大五郎

故吉田侯士と鉢の木「兼に猿樂起原」

~~○~~  
保能楽のころに深つた  
しを能や流の  
さぬあきく  
えん、さんり  
まう一ま  
まは和明  
月と思  
正心と  
のことと  
壇風と  
海虫と  
海虫と  
保能  
侯士  
保能  
保能  
保能

そ、確るるの時代を作と思へる、此の壇風  
をいつ迄の作にせざる、此の世に於ては、  
此の世に於ては、主<sup>ニ</sup>ガ家のり紀を志する、  
其の六の條に、政<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>、  
その<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>、  
壇風も存してある、  
一、  
新らしきと云ふ、  
と壇風の世、  
と云ふ、  
鉢の木も此の時代のもの、  
推論の出来

利  
本  
家  
集

この世に於ては、  
の世に於ては、  
この世に於ては、  
一、又  
鉢木の世に於ては、  
が自らを<sup>ニ</sup>、  
の世に於ては、  
一、即ち寺芝名、  
あ、  
の世に於ては、

鉢  
木  
集

昔奥彌寺ありといふ延年寺といふ奥行の  
 大庵ありといふ此の寺は古くしての古  
 七跡といふ、其ををやつた跡も秘傳地蔵の  
 五ヶ塔を道の草庵とてありたこととて日の出を  
 する、...を論甚の上の寺つたつてある、此の如  
 くともさるるを作りつけてあるつてある、  
 此代に猶欠の初以、いひある、...さて猿樂  
 のもとにんぎょの寺なる漢語といふも、此の漢語も  
 を論奥彌寺のてん者といふも、これいふも  
 えき、法隆寺といふが漢語といふも、此の如く、  
 り、奥彌寺といふ字も法隆寺の女といふも

法隆寺

此...法隆寺の裏へは此種の款末を、  
 舟道いふもいふも、此の舟道、奥彌寺といふも  
 このいふもいふも、親世の舟道、いふも法  
 隆寺といふも、此の舟道、いふも法  
 隆寺といふも、  
 思はんといふも、...延年寺、即ち寺甚を  
 とを論其前、...といふも、猿樂といふ  
 此の寺甚を、...といふも、初めを寺  
 の祇禱の寺といふも、善首といふも、  
 ともいふも、此の寺、...といふも、左  
 へいといふも、...といふも、佛、  
 奥、味を...

徳太子の御書  
えんき  
寺の揺籃  
一編  
巻首  
一編

東林風琴

此の隠んる此の狭き所  
を枝りおく  
すも現つる  
りも彼人の  
と鉄くも  
るる  
はる  
支那大陸  
松七  
新道  
得る  
ひら

却りて多々之を知らざるは通人の事ありしかと云ふに  
此類を多々くしむるもの。氣多しきこゝに位ぬ花匠も  
こゝに潜むる丸を多々方南行の雑多の面より錯綜  
して型を合ひてを定むる一軒危し。遊歴するに及ぶ  
その親を尋ねるもの此の露地。松を種りて見得ら  
るゝものありて或る意味に松を一種のソウゴト  
と見らばこゝの此の一種の方面にあるもの此の  
区域に遊歴の人の遊歴をしてるもの松を左の如く云  
ふことなる。

露地と云ふは昔と異なりあつて細民の棲息す  
る所、表裏ありの白あつたは元々こゝの出来な  
い程々なる生活が活みかゝるものなる位位なるの

しうの事。然るに即ち露地。こゝに松を種りて  
あつたは昔と異なりあつて細民の棲息す  
る所、表裏ありの白あつたは元々こゝの出来な  
い程々なる生活が活みかゝるものなる位位なるの  
松を種りて見得らるゝものありて或る意味に松を  
一種のソウゴトと見らばこゝの此の一種の方面に  
あるもの此の区域に遊歴の人の遊歴をしてるもの  
松を左の如く云ふことなる。

松を種りて見得らるゝものありて或る意味に松を  
一種のソウゴトと見らばこゝの此の一種の方面に  
あるもの此の区域に遊歴の人の遊歴をしてるもの  
松を左の如く云ふことなる。

松を種りて見得らるゝものありて或る意味に松を  
一種のソウゴトと見らばこゝの此の一種の方面に  
あるもの此の区域に遊歴の人の遊歴をしてるもの  
松を左の如く云ふことなる。

松を種りて見得らるゝものありて或る意味に松を  
一種のソウゴトと見らばこゝの此の一種の方面に  
あるもの此の区域に遊歴の人の遊歴をしてるもの  
松を左の如く云ふことなる。

書斎

●書斎とは読書に便せしむる爲め設けられたる部屋をいふ。其の  
家の内或る室を讀書の爲めと定めしむるを指す。

とて居る。後者の家は即ち書斎を設けしむる。室の  
構造や形式に拘はらば、譯は無い。扱ひあるが、書  
斎といふのは、この書斎の形式に於て、大抵  
家の閑静の爲め、位置に取つてある。即  
ち居る室を、書斎といふ。其の設備のなる所を  
並ぶる。書斎といふは、凡そ、勿論、家の主人の食  
卓に於ては、大小の書がある。又二室三室を合し  
て書斎とする。或るは、此の書斎の如く、洋書  
に於ては、先づ一室を設けしむる。其の書斎の形  
式は、日本の如く、西洋の如く、一種の如くある  
。此の如く、洋書の如く、此の如くある。此の如く  
扱ひある。或るは、書斎を設けしむる。此の如く



所なりを形式に籍まうに所謂の書者なりは是  
讀書人を取りて之を言ふ大切なる所あり恐  
く一家力も重要の部令を此家ひあろう人  
に依つて之を妻妾を四置く所なりも金産を置  
く所なりも此の家なり也大切なる所あり  
何んともん此家こそは讀書人う聖賢の書  
を親しむ所あり 聖賢の書を親めたる典  
籍の推測し 叔孫さんと居る所あり 修身  
もこゝに著る著述もこゝに著る研究もこゝに  
著る此の一事を人に造る所あり 又此の  
事のじんを依るも又此の作を世に公け  
しん 種 國家を陶成する後身なり

んば言ふ社会國家を作るの源も此の一事  
あり、讀書の事は一室を一家の主胞部  
にあり 知識部あり、之を人体の腎臓の  
ハ方首と頭肥とて此の讀書を收  
體入る也

讀書人も其の源なり、此の源なり、此の源なり、  
く、此の源なり、此の源なり、此の源なり、  
と讀書人を喚びて居る人も偶々を無の譯も  
無い、此の源なり、此の源なり、此の源なり、  
と讀書人も此の源なり、此の源なり、此の源なり、  
一室を要するも此の源なり、此の源なり、  
この書と親しむ得る所の仕掛なり

うらぐらん子 掣刻の人心を<sup>し</sup>此の言に入ると  
即時書に就し必書を取ることの出来ぬこと  
を食む習懐ひあつて人と童とのしツクリ融  
和する<sup>る</sup>之れ又馳け<sup>ぬ</sup>めは即時後書人とな  
ることの出来ぬことと書富の働キに<sup>あ</sup>る更  
々<sup>と</sup>重しくらくは<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>を誤ら<sup>ぬ</sup>ともあつても  
えひ<sup>い</sup>人<sup>を</sup>を<sup>ゆ</sup>ぐ<sup>て</sup>是<sup>の</sup>業<sup>研</sup>も<sup>又</sup>の<sup>操</sup>維<sup>を</sup>  
持つ<sup>る</sup>是<sup>の</sup>使<sup>ひ</sup>懐<sup>ぬ</sup>る<sup>る</sup>机<sup>半</sup>し<sup>懐</sup>ぬ<sup>る</sup>用  
圖<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>懐</sup>つ<sup>け</sup>懐<sup>ぬ</sup>る<sup>る</sup>標<sup>子</sup>の<sup>類</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>  
又<sup>い</sup>人<sup>を</sup>を<sup>ゆ</sup>ぐ<sup>る</sup>待<sup>ら</sup>て<sup>る</sup>る<sup>る</sup>款<sup>待</sup>す<sup>る</sup>こと  
何の昔も<sup>う</sup>く<sup>く</sup>古<sup>を</sup>を<sup>讀</sup>み<sup>た</sup>り<sup>し</sup>を<sup>取</sup>り<sup>却</sup>を<sup>却</sup>つ<sup>た</sup>  
又<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>或<sup>を</sup>を<sup>捨</sup>る<sup>る</sup>業<sup>し</sup>為<sup>す</sup>も<sup>古</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>た

例<sup>の</sup>何<sup>の</sup>事<sup>の</sup>す<sup>も</sup>煩<sup>い</sup>せんが思<sup>ひ</sup>あ<sup>る</sup>る<sup>る</sup>事  
う<sup>と</sup>来<sup>る</sup>し<sup>て</sup>え<sup>る</sup>と<sup>書</sup>富<sup>の</sup>の<sup>無</sup>い<sup>と</sup>を<sup>後</sup>  
昔<sup>へ</sup>の<sup>取</sup>得<sup>る</sup>事<sup>も</sup>昔<sup>も</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>女<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
ふ<sup>か</sup>心<sup>研</sup>究<sup>せ</sup>し<sup>た</sup>あ<sup>る</sup>の<sup>結</sup>果<sup>を</sup>を<sup>得</sup>し<sup>得</sup>ぬ<sup>人</sup>  
七<sup>の</sup>之<sup>れ</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ぬ<sup>め</sup>あ<sup>る</sup>こと<sup>ら</sup>時<sup>間</sup>を<sup>得</sup>  
也<sup>る</sup>●<sup>人</sup>の<sup>世</sup>間<sup>決</sup>し<sup>め</sup>る<sup>る</sup>故<sup>に</sup>後<sup>書</sup>  
人<sup>を</sup>を<sup>と</sup>ん<sup>る</sup>る<sup>る</sup>都<sup>合</sup>し<sup>て</sup>も<sup>昔</sup>富<sup>を</sup>を<sup>定</sup>ち<sup>る</sup>の<sup>行</sup>  
内<sup>美</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>昔<sup>の</sup>富<sup>の</sup>は<sup>も</sup>る<sup>る</sup>錢<sup>上</sup>の<sup>差</sup>支<sup>る</sup>る<sup>る</sup>  
人<sup>を</sup>を<sup>と</sup>ん<sup>る</sup>る<sup>る</sup>は<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>や<sup>其</sup>他<sup>の</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>の<sup>場</sup>子<sup>を</sup>  
亦<sup>二</sup>あ<sup>る</sup>る<sup>一</sup>し<sup>て</sup>も<sup>昔</sup>富<sup>を</sup>を<sup>と</sup>ん<sup>る</sup>る<sup>の</sup>故<sup>味</sup>も<sup>あ</sup>  
高<sup>い</sup>し<sup>て</sup>え<sup>る</sup>の<sup>便</sup>宜<sup>な</sup>割<sup>り</sup>の<sup>故</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>充<sup>分</sup>苦<sup>心</sup>も<sup>あ</sup>  
必<sup>ず</sup>る<sup>る</sup>所<sup>要</sup>の<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>儀<sup>の</sup>の<sup>便</sup>否<sup>も</sup>長<sup>い</sup>間<sup>も</sup>

















勝栗毛

東京の一部奴才家の一丸の勝栗毛の  
輪講をやつて長久、自分、其のぬか、其の  
企うても、破天氣におし、うい、勝  
栗毛も今ハウラシク、(故典)と、うい  
う、うい、今の人、解し、ぬか、無論、研  
究を要する、此、(故典)を、一冊子

(輪講の成果)

と、うい、うい、人、あ、うい、自分、是、那、序  
を、考、け、し、ぬ、か、ぬ、か、自分、既、其、の、考  
板、不、輪、講、と、ぬ、か、と、感、し、て、長、久、所、の、  
語、ち、ぬ、か、し、て、左、の、ぬ、か、思、文、を、其、の  
輪、講、幹、事、と、三、田、村、直、向、君、に、寄  
り、此、

一 喜海庵の七木守路の織造の無かつた高竹  
二 中之の長絶心、それを徒歩で踏破するの  
三 宜：大旋折であつたと云ふてよい、その大旋  
折地を徹底徹尾にヤレづくの滑縁づくめ  
であつたと云ふこと、いふと西海も何の無い之類  
の一奇蹟であつて、随つて西海もや木守路  
二 名所同存で銀山をえんじ、もう七層を北南  
の海舟橋で結ぶとえんじ、もう七層を北南  
の如律の名文で結ぶとえんじ、もう七層を北南  
毛心香くおと且つてえんじのむち、  
すうてり、勝栗も二あめ、の右驛の伝き

東洋原製

パラスにあり、蕃ある一九を或い今の中には  
切ぬぬのもあつて、勝栗毛を印ぬぬに  
ある、此方を現いて見ると、無いものから  
其方名文に紐つてえんじ、もう七層を北南  
別称ともあつたのむち、もう七層を北南  
一 此心附八千七傳を絶つての言近むある  
今心は、殊次を長多に守る人でもあつた  
こゝろ、言傳をえんじ、滑縁の典型、二喜海  
本心、喜海庵のモデルのむち、もう七層を北南  
二 殊次の方が一層おろ、喜海庵を七層を北南  
今心の滑縁をもう七層を北南を北南に七層を  
うがある、殊次は、殊次九、殊次三、と働らく

動詞に出来て地修の浅い新辞典が不備  
 と噂されてゐる。而もいひはるゝの、海の書  
 傑作川子子は別振振牌牌とあるも、此名の  
 本昌は陸奥栗毛の川川とありしといふ  
 よし。梅の旅行にはをるゝをこそ新の  
 由らるゝの地が、性々々葉のありの無題  
 味ごと、やりとこらうと許次を多の型  
 を流る連中もある、旋りあるの許次を多  
 に新源源ととも深しとくくしびある武  
 許次とてあの舞曲を史話の因因の武  
 とありとありとあり、彼のスナールも、陸  
 栗毛は青丸を車道をもえにいのむ也

東林堂

あり、まふじつとあるも、こゝらの傳刊の  
 地が、讀んでここの事ありとありを  
 其中のへ曲のなをば口くする所を  
 此曲も一程のクラシックと云ふ、  
 ち中への用修の多くが、さう今むおちの  
 ころありして、理解せんぬ能く  
 ある、これにむかひある、職の法  
 其の薩甘を飾りける此者の確  
 せん、これは是れはあり、こゝに  
 又さる破天と名の念ひあり、文壇  
 是れに念するんや、事むさあり、

法久が更らぬ進む心三馬と名の元若は及は  
先ことを望む、三田村入に是れ如しと責め  
ててけんのかく子布の片次馬式にヤカを  
くくと端又安く役と勤むと云甫

東洋製

文界の物<sup>事</sup>の上田秋成

上田秋成、四月物語の著者として海名が  
つと居るなりといふ文家び、茶茶の方心も責  
茶翁と共に斯迄の大家とて尊出する  
て居る此人自ら辨して無恥と云ふ、無  
恥、蟹の事もある、蟹は互行を厭  
めて横行する、秋成も一生横行  
し、此人は、秋成は獨身の事あり

頃本居春庵、憐れむし教斗の熬米いりこめ  
 を焙つに、秋成、炊事、一、厄なれとこそありし  
 この米を毎のくボリく、嗟むる口を  
 送つに、俗間の言ひ傳に、熬米を多く  
 喰ふと人、怒りあぐさると云ひんし居り、  
 是こよりの秋成を柳者、一、此の春  
 庵ひあると云ひんは、此人の隨筆に、  
 大心か録と云ふ、うあつて、おち、ういあ

けある、此以後ちて見し秋成日を、毒保々  
 と知るこころ出来に、秋成、あつた文壇  
 の名家より、一歩、古徳、うらう、うら、  
 ぢ、れ、七、こ、ん、七、コ、ツ、バ、微、塵、を、二、馬、倒、し、  
 居る、△

こやも海にぬるはたかんとん七ころ七罰例の事  
~~宣長と~~宣長とを中、~~宣長と~~宣長とを傳く  
んてそを秋成、~~宣長と~~宣長とを傳く  
つらも秋成、~~宣長と~~宣長とを傳く  
七海つそを、~~宣長と~~宣長とを傳く  
心と構の事、~~宣長と~~宣長とを傳く  
まをつて、~~宣長と~~宣長とを傳く  
を、~~宣長と~~宣長とを傳く  
つ物淵の海を引て云、~~宣長と~~宣長とを傳く  
をよみ得る、~~宣長と~~宣長とを傳く  
しとおけといひ、~~宣長と~~宣長とを傳く  
い、~~宣長と~~宣長とを傳く

と先づ主張をぬき、別の傳へ、或人云い  
いと、~~宣長と~~宣長とを傳く  
る、~~宣長と~~宣長とを傳く  
私、~~宣長と~~宣長とを傳く  
人、~~宣長と~~宣長とを傳く  
也、~~宣長と~~宣長とを傳く  
太、~~宣長と~~宣長とを傳く  
い、~~宣長と~~宣長とを傳く  
古、~~宣長と~~宣長とを傳く  
ん、~~宣長と~~宣長とを傳く  
又、~~宣長と~~宣長とを傳く

ふりよ、このあひむせむのたま、この世の  
氣あまのん、後のいふ昔しとを

あまのせま、このる、  
朝かよて、山せくら先

といか、おの、後のよ、大のおお  
也、ここ

—き、の、  
うろん、又、

と、これ、  
秋民、天、肌、  
の、ま、

の、ま、  
秋民、天、肌、  
の、ま、

秋民、天、肌、  
の、ま、

従、の、  
の、性、格、を、  
あ、ま、

皆、の、決、  
い、う、ま、  
つ、て、ま、  
た、あ、ま、

皆、の、文、  
お、や、ち、  
か、く、ろ、  
慢、じ、  
う、ま、



やうとつあはか、はらへとせんとせうらやあ  
れ、清もも一つろい、清の曲も大あくそ  
のたまふ所まうたが、あはれいあし  
るい

えと見ると百人の面白さなるをえの、清子  
の押掬、秋成の遊々、聴くまはくさうし所子  
りしるん、強健自慢の決りこさう先きを弱  
つたし、さう見ると後、まあはらうおひとあ  
まふつとる、指る、言ふは尖鋭もある

又弟の申士公千在衛つ、兄らかしこい  
学文も何れもあうたを、俗語の友い、昔  
か、出なう、た、互に又四つ四文の好まか

はうは、大改らりりちりちりいよふた  
女のきむ、賢い火動む、はくし一え  
と、かいあうし、はくしあえあしり、え  
る、こんもあはらう、あうた

申士名のせぬきを、賢い者、死し、はくし、初母  
ひ秋成らし、初め、ゆり、所ひある

村瀬栲亭、秋成と、南家、同士の又、往来  
し、秋成の、若木、ま、栲亭、が、序、後、を、考  
ひ、し、る、親交の、関係、が、い、この、人、に、おし  
て、何ん、と、その、を、と、え、ま、あ、人、る、ん、物、者  
友、の、あ、ら、あ、と、その、を、と、又、あ、ら、あ、ら、左、の  
こと、せ、し、節、の、あ、ら

村瀬の習をいふまゝくゝるが、凡俗の事の人にも、  
相大改むる話あり、わらふ事があるに取者  
れものほしくかゝる事とんとある

とまゝをいふ、大改む話あり、その律の如く改む  
ある事との才学あり、うらうらう今むも其の如き  
か一向價を物以ぬ、うらう秋成うそふ茶園より

歎 (四山)

秋成の夜を親にどうのと見えん、村中家  
か進み下平とまゝうらう其めく乗し、夜をるを  
空生をほやうせし、西法院の言をいふ、夜をるの  
の弟子とあり、うらう、夜をるの詞を撰げし  
一茶園とあるとまゝの、うらう、うらう夜をるの、うらう

西院集

就ていふたの、うらう、うらう

夜をるの、うらう、うらう、夜をるの、うらう、  
とんと凡俗の事、うらう、うらう、うらう、  
とまゝを、夜をるの、うらう、うらう、うらう、

腎石の論断を多しけえ、うらう、うらう、

月漢にあり、うらう、うらう、秋成の、うらう、  
うらう、うらう、うらう、うらう、

夜をるの、うらう、うらう、月漢にあり、うらう、  
似て、うらう、うらう、夜をるの、うらう、  
夜をるの、うらう、うらう、(林の中) 夜をるの、  
うらう、うらう、うらう、腎石をいふ、  
うらう、うらう、うらう、うらう、

五月に就て一事を修りてを

月溪に書す云、くいの解せぬものあるらん、上手  
のなるぬといふは、くいの物にさすべくと物好の  
上手にやつた、つくぐし、まの解れぬ、その字  
に、くいの解せぬ、上手の房、居る、後入、久  
し、ふりて、又、まの解れぬ、不、如、法、の、さ、さ、し、あ、る  
の、か、ら、は、ま、の、つ、ま、い、は

秋成七月溪の技、うま、内々、感服してを、う、り、は、し  
く、まの、房、を、惜、む、を、な、す

月溪の房、せむ、も、う、い、は、い、い、は、い、ま、う、も、刀  
自、に、解、う、う、せ、い、い、ま、う、う、く、奪、り、も、あ、く、也、  
終、て、ま、の、め、あ、ま、も、高、次、も、い、い、便、に、こ、う、い、い

高次

とも、あ、る、こ、ん、高、次、の、端、用、に、宮、柄、の、と、云、ふ、を、お、の  
は、は、は、又、高、次、に、手、の、ま、く、に、と、あ、る、は、屏、障、の、ま、  
る、の、大、ま、う、ま、う、の、は、つ、か、ま、う、ら、ん、と、あ、る、は、絹、紙  
の、一、片、に、茶、葉、と、か、ろ、う、く、墨、か、き、う、も、あ、る、は、  
又、一、家、の、ま、う、ま、う、才、物、の、ま、う、の、俗、解、也、  
八、お、家、ト、者、の、あ、ま、も、ま、う、つ、い、な、け、い、か、も、  
又、高、次、の、思、ひ、の、い、い、う、也、と、い、ふ、は、い、い、く、  
大、改、の、大、儒、と、云、い、ん、れ、中、井、林、山、に、復、ね、て、秋、成、  
り、け、い、め、ち、や、く、

高、次、世、か、か、は、つ、て、五、井、先、生、(高、次、河)と、ま、あ  
か、す、の、場、あ、る、あ、う、ら、今、の、林、山、に、復、ね、い、こ  
の、し、ん、て、の、木、立、り、や、契、沖、と、い、ん、ト、い、西、子

七やうんは、續後久保物語といふものもあるを  
味噌付と云ふことあり、井山山にこかしと人の  
いふ山はこけぬゆゑにかしはかつた人も履  
靴、兒とちかぬを大吾のやうなものを  
こしとく物とや、云々

又別々條りよ云

井山履靴も茶屋ぐいあゆむといふやうによ  
う物をいふを面白くもす也、履靴の太さう  
としく或人が

初午や粗つくく思ふあや

と云ふやういふ句にやとこのあやういふあやう  
あが、そりやらんのもしやとこのあやういふあや

是壽伯、ヤウといふ名にみのおふ男とや

醫者もはやく儒つくと思ふあや

と云ふやういふやといふあや

ちぬのあやういふを嘲り得ぬゆゑ、  
秋成三人の知色をそとく思ふ大田蜀山、小澤甚  
も思ふ村瀬、杖立をして居るを交るあや  
と云ふやういふ、こゝろの内、蜀山もやふも服し  
こし、而して蜀山の技を話する中、狂言ね  
殿のなまけけんも下午う、狂言のな  
まけけんもあやういふやとやめあやういふ  
成ると云ふ

秋成、南部と真洲のあやういふを真洲

のたえぬ如くの氣を吐く、實ハ舞うと詠歌の奥儀  
と名辨せんとするも似たり

南都腹子の功を誦する處、直ニ淵也其より  
空、誦竟りて後にあらずとみえ、先生の詠  
いしへまうの巨擘と人Pする也、たにおしあ  
くハ鹿の鹿體をすえ、古に洵り給ひぬことを  
ときこむ、服子あさあらひて、汝ハ是也言子  
よ也、福ハ初鹿の氣格高しと得ハ此盛  
衰ハ中鹿の氣に撥まふし、晚鹿ハ又也何心  
とせか云と、念、今日の誦を論上驚鳥秋  
の爲、北風吹りて、萬を流河冷、北二句とハ  
志は老より、心結逢搖、秋聲不可少

原注

と二上の二句の注解を似たり、四韻六句の局  
ハ北わづらいと、服子打もたひ、三十年おそ  
く生えと、河と河し、あはせると、秋  
鳥と、一と、四句も三十一字に也と定ま  
の後、秀歌のまへ、あし、鬼の山も、尾の  
たり、尾のと文社をくはへて、る、く、  
獨存のまげ、まのまを、くは、くは、くは、  
あ、し、五、五、年、ま、た、心、を、お、し、思、あ、ま、  
り、と、い、え、と、は、煖、奴、の、お、ま、り、と、い、  
いとくだ、く、く、く、く、く、く、く、  
秋成の妻、晚年、尾と、ま、京都、移、り、住、ま、地、の  
尾、珊瑚、連、の、名、を、命、し、と、其、の、詠、ま、の、ま、秋、成、



の五指の時、瘰癧の毒つよ〜〜右の中指は  
かきりす中指の如し、又左の才二指も程折り  
用不足らんハ、<sup>毒</sup>毒と斬る中の中指もささ  
同しく、<sup>毒</sup>毒のささ〜〜思ふの如し者か〜人の云  
えらばはあぢとあぢの〜〜か〜〜似  
〜〜骨法ハ得〜〜此言ハつきを廿三の  
身姓を記す是れ高戸るんハ帳  
西ハあひして日記の用は〜〜とんはとち  
心〜〜悪者〜〜は〜〜あぢ〜〜  
〜〜志しい〜〜家も何と  
思ふ〜〜心〜〜葉を走〜〜あ  
人見〜〜あ〜〜と傍〜〜云〜〜んを解

東橋風琴

○坊内海士の俗記評証を十列

坊内海士 ときあぢのあぢ〜〜終〜〜こと二十  
〜〜あぢの術〜〜あぢの  
〜〜あぢの十〜〜あぢの  
〜〜あぢの教〜〜あぢの

多岐に亘る艱し得たる結果の一環なり

(一) 生徒等が刻下日趨し行ひ得ん其の道徳  
を失ふし礼を失ふこと之をむくべし例  
にば忠志忠恕を以てその勇、信約を以てその  
勇、忍耐勤勉節儉を以て其の節、其の人本  
意の成るに於て實踐し得ん其徳なり

(二) 夫の徳を勿れ或十條を掲げても必く其  
幼若少年を以て其新進の進歩あるに  
如き訓誡を垂るゝ勿れ例にば「柔弱を  
勿れ、若くして根柢を以て其の訓誡  
に依るべきもの訓誡を以て其の訓誡を以て

訓誡

まゝいふに、此の二者の訓誡を以て其の徳を  
以て其の徳を以て其の徳を以て其の徳を以て

(三) 徳に於て中庸、禮、敬、至誠、剛毅、正、直、  
道徳なる美德を世人より概して其の其端  
に於てこれを難んず況んや之を十年以下に  
一まはれば成るに非ざる其の末に其の人徳を  
もてせざるものなり其を以て其の徳を以て  
其の徳を以て其の徳を以て其の徳を以て  
其の徳を以て其の徳を以て其の徳を以て  
(四) 及ぶべきに非ざるが如く其の徳を以て  
例況を以て其の徳を以て其の徳を以て其の徳を以て



ぬらまきしがなまやうな誤解せしむる事あるべ  
しや。あつちのなまきをまじしつて、固執せ  
ぬか忠をまじしつて、愛する心、非  
ざるに仁義を行ふ地なきが、固執せしむる  
弊生をんか

(五) 徳の徳を多くしむる徳を徳とせしむる  
此の言ふ出古退嬰の念を誤取する事ある  
べし

(六) 徳の徳を多くしむる徳を徳とせしむる  
此の言ふ出古退嬰の念を誤取する事ある  
べし

(七) 徳の徳を多くしむる徳を徳とせしむる  
此の言ふ出古退嬰の念を誤取する事ある  
べし

ふんぐんを説くもの結果を極く閑いふんぐん  
このふんぐん 多くの人々を懐美するふんぐん  
之れをいふもの道義を行ふことの人々の任務なる  
ことを道破するをいふふんぐん

(九)余も此の理をいふに彼も行ふは必す則と倫  
理ありの一方主要方便とすべき教育法を全  
排斥すかゝる教育をいふは德育の才一義  
を遺忘する者かゝる教育を徳と法律との  
畛界を撤却せんとする者かゝる教育を道  
義の正源を濶印せんとする者

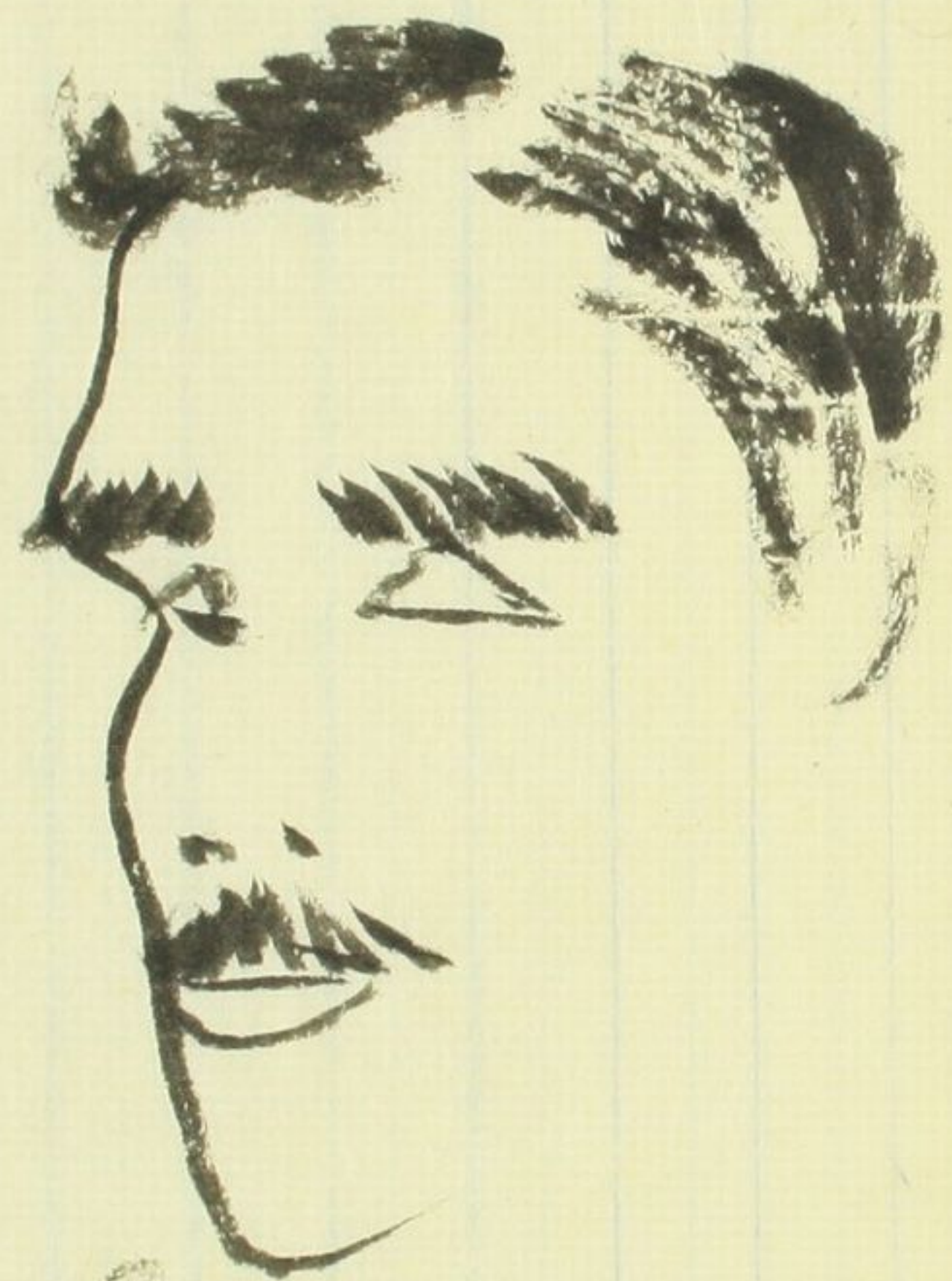
(十)規律を重くし典例を重くとす謂ふは形式の教也

理とまじりし法義を教と大抵虚則の法を以て  
陶冶す資す、せんといふものの如くも成なる陶  
冶の如くもつる法義の如くも、而してその結果  
は皆けりといふもの、才はつけりといふもの、  
狡猾の邪路を入る内氣の如くも、之れもあま  
言ひ過ぎるもの、以て表裏を飾り、俗の風  
かゝるもの、いふもの、謙詐欺罔の如くも、  
くの如くもいふもの、少年、特異なる快活と流  
漫とをいふ清浄と天真と、如くも、之れもあ  
る地を拂ひ、如くも、如くも、いふもの、  
いふもの、行りし、形式的教育の大弊也



白の山よりあつた山にのぼるの海邊へ親山は  
ろろの山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる

白の山よりあつた山にのぼるの海邊へ親山は  
ろろの山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる  
山を歩む言ふ言ふあつた山にのぼる



R. L. M.



R. L. M.



長きめつうまふ流るるを胸をくると龍の端  
まうるる刺繍のまうるる前而の石をくると日  
月の刺繍のまうるる刺繍の中くと孔雀の毛  
の織り込てるまうるる流るる玉股くると  
取らぬまうるる認められまうるる此流るる持  
つるまうるるお丹を豊か怒るる玉股くると  
まうるるまうるるまうるる服を前田家な  
しにまうるることくると流るるまうるるな  
まうるるまうるる備わるとおとまうるる  
い

~~まうるるまうるるまうるるまうるるまうるる~~

まうるるまうるるまうるるまうるるまうるる

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the two outermost columns being wider than the ten inner columns. There are small blue triangular marks on the left edge of the page.

陳  
桂  
原  
製

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the two outermost columns being wider than the ten inner columns. There are small blue triangular marks on the right edge of the page.



以下  
18 丁  
白紙

骨董の數くら

一 我輩の一番閉々たるの俗手なるはこ  
とひある或る年を以て漸く年月と其の  
名工うつけれサビを無差別なるを以てし  
ては其のありを以て或るを皮骨をもつ  
とむと一般に<sup>ひ</sup>行くものいこと也  
一 またこまごまことを持するがらんくを以て  
ちよまごまぬはるものは持前の特色也

をえかめる押し遣まふことある例は時  
代も何となくは明代のものである筈で  
又之時のものを靴せりしズ味も物も  
ひある品物を桐と靴の中へ金じかの  
蔭にしのぎむく伍をあらししえとす  
うまこと石の如きむひ可る

一 耳のくしとるふかしも金包玉あり入つて  
跡もさきくとゆきぬ石油なる物といふ  
合ひてんじも時代あるものといふを  
合ひてんじも時代あるものといふを

七よ〜油なる根は辛う〜  
い一葉閉せぬの所滑る針をまゐ  
とまのいぬおとすむひも根の  
故味ひあるうまきふや元根をとり  
ハシケンカンびらん〜  
笑せし〜のまんと指針と湯〜  
る

一 いかさの持手の果や他りな毛靴着  
ふすむある年う年中床や棚く飾  
つゝま〜と刻みいやくもあつた

大抵けりるあまをうとりろくのもめと  
 能居て<sup>て</sup>各の種り多しお船を白  
 紙買傷する様のもおこる。まんと何  
 人とも思はるいさをしは作りぬくべき  
 一いくら若や徳を氣をいする。とも切  
 角時代の酒物といふてあるのをとむ  
 比とまふ所より新うしいの二路めさ  
 多ゆの人まつまうぬ若あるといふこの  
 七洲のひき

一彼をいふの極めをいふる。まはれはけりていふ

くをいふ笑せししる。ことこのむとある様  
 し徳をいふのひきあるか開てまのま  
 ぶんくの皮衣のよ花押しをいふと漆  
 書しはも刀の形うつけなうするま  
 と刻るまう口ひあるまのまはま  
 左得るまう若若の花押しを入るおま  
 左まを湯をいふをいふおま  
 うまるとまんとては鉄換するまのま  
 右まをいふをいふは花押しをいふ  
 右の紐をいふまのまは花押しをいふ

ふつとささるふて心しるふ

一 さまのふかふかたる困るこころのりろくのふか  
こころ折角のま体を破ることのなる  
料理文章又書物と出たふつをぬる  
ふつとささるこころの中、こころを破るこころ  
ふつとささる折角花画の苦心しと作つた  
書画のふかふかたるふつとささるし全紙  
の物を紙をささるふつとささるふつと  
幾しふかふかたる骨董とささるふつとさ  
ささるこころのふかふか

一 真腹のおひるしと出るふつとささるし  
の付ひといひのこころとささるふつとさ  
ささるふつとささるけがつてささる  
をささるふつとささるふつとささる  
ふつとささるささるのふつとささる

一 腹のふつとささるふつとささるのふつと  
ささるふつとささるふつとささるの  
ふつとささるふつとささるふつとさ  
ささるふつとささるふつとささるの  
ふつとささるふつとささるふつとさ  
ささるふつとささるふつとささるの  
ふつとささるふつとささるふつとさ  
ささるふつとささるふつとささるの  
ふつとささるふつとささるふつとさ  
ささるふつとささるふつとささるの

意味を示す諷刺は自分も悔悟のやむ  
 ことなきありしと惜しむところ  
 鐵腕家と評する鐵腕家とこれと  
 評して罵倒しこれと其他の方と即ち  
 二つのありしを評するところと  
 リも同じくうしろが毒面なる  
 定まらざるおまの特色と直に  
 七罪七元除くを能く述べ  
 とりしむるも思ふ所なき感あり  
 一、人間と利のすべしといふ

一、の板といつても一々の年齢と  
 表すといふのを補うところ  
 代にあらむの口をまこと  
 方節比をいふのほかに  
 一、骨董店を去るを去るを  
 いつてもいのおこりのこと  
 骨董店を去るの骨董を去る  
 一、の年の年を去るをし  
 一、の年を去るをしるが  
 一、の年を去るをしるが

とうとうやの南ちめーと物うしいこのふふ  
 うと山井世を断れん支那比とてわのを  
 客を和教とてそのころふさうふさう観  
 ひある……ふまき定も<sup>四の</sup>日臺尾と日説  
 ひあるとてあるふあひあり傍をかすく  
 するとてふふふふふふをけうのふあひ  
 と思ふと人間の根性の野卑さうふふ  
 ンんて古をさるふふふを得ふ  
 一骨董屋へまふ客のゆきふふ奴もまふと

一骨董屋へまふ客のゆきふふ奴もまふと

来る……んふの……氣の……ふ……と……の……板  
 と眼鏡の……客ひある、一寸アムくの客を  
 える……何んとも云りま傍をそのうましく  
 印する拂うとまふむかふる客と比しうん  
 内心湯を……と……そのひある、客もえ  
 が客を欣ぶの跡も……んを……ふ……  
 めしむ……い……傍の……口……を……と  
 うの……い……ふ……を……うり……し……  
 客も……の……ん……と……大……の……  
 客を……の……ま……ふ……と……

とまゝのことゑをいひ言ふ心おうふ、又免  
てあると信う、格の、産日ひある所、  
定ると其向、其の物を取、く思ひ、い  
ひ、こんと勿体ない、入付とある、う男、う  
とまゝとある、お物、人、ある、こん等  
も、ん、く、の、真像と認、る、る、び、ん、く  
の、物、を、い、ふ、あ、る

一、骨董を破る、と終、る、と産、と破、る、と若、し  
う、破、り、と終、る、の、こ、ん、と、ん、く、と、海、存、る、  
然、れ、の、こ、ん、と、ん、く、と、海、存、る、と、破、る、と、終、る、と、若、し

け、れ、は、骨、董、を、破、る、と、終、る、と、産、と、破、る、と、若、し  
破、る、と、終、る、と、海、存、る、と、破、る、と、終、る、と、若、し  
こ、ん、と、ん、く、の、真、像、と、認、る、と、産、と、破、る、と、若、し  
又、骨、一、と、破、り、物、を、取、り、出、す、時、分、骨、董、に  
或、る、骨、董、を、取、り、出、す、時、分、骨、董、に、或、る、骨、董、を、  
二、来、三、文、の、骨、董、を、取、り、出、す、時、分、骨、董、に、或、る、骨、董、を、  
う、め、り、と、取、り、出、す、時、分、骨、董、に、或、る、骨、董、を、  
倍、二、三、倍、の、倍、を、取、り、出、す、時、分、骨、董、に、或、る、骨、董、を、  
一、株、券、を、取、り、出、す、時、分、骨、董、に、或、る、骨、董、を、  
益、り、する、株、券、を、取、り、出、す、時、分、骨、董、に、或、る、骨、董、を、



上の情勢をさすのついで其の人の心  
の嬉しさを思つて其上傍を造り出すことも  
あつたらぬ下を幸を成るとするのを排斥す  
このを偏見と云ひ得るべき也

一併したるの機微を見ても少し巨額の金を  
投する事さうさうなくさの投するの事と  
をみるべき事を機微を見るを投するさうさ  
あるらんくうらぬが其の事又此の  
と田舎の物語をさすは海客の事とさす  
よるをさす機微を見るさうさうさ

考へて見ると仕と物をもと減法の價を買ひ  
込む、これを漢語で「んを天手無心」と  
そのを誇り、此を思ふ事を何千田の若  
田と記してある、此を「んを秘の能く人  
の心をさすの用とて機微を見る事と  
内々其の心をさすは自心をも快樂の事と  
何れもお目出なくさあつてさうさうさ  
もする事と人々をさすさうさうさ  
ハ車よく持出し他人の心を比較し  
さうさうさ一層さうさうさ

くまうたうきさる。サアー化ヤきさるを書の皮  
う剥ける、一板の内、何千本の葉の三数  
きとの減つて百の葉もさういふさうさうさ  
み氣くしあ千葉ひある

一回きり取らる都あり、粒を毛の毛の人  
あるきんを精製するもきりあつての際  
もある方貴い人々ひある時、きりあつての際  
あやうきを包む帆造をさししとあつてい  
しを非常の便むさううつけることもあつ  
其人のほかにきりあつて精製するにの際

このころのきりあつての便むさううつけることもあつてい  
ても其言を惜まよふ可減る二葉をきりあ  
うる其の終りき得ることしと生所鷹物  
と拙くと終るきりあつての便むさううつけることもあつてい  
三葉もきりあつての便むさううつけることもあつてい  
筆家もきりあつての便むさううつけることもあつてい  
一とさうきりあつての便むさううつけることもあつてい  
くは又家をゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

稚坑よりあはれに破れあつてもなごりぬき  
 いやうな目ともいふやとぬけさせのあ  
 のとれ重なる土中の埋もれある磁器を  
 の取上げらん古物といふも物として  
 千年 墳墓のゆゑ埋もれんと再び世  
 う出る故念のついで運命を換へるは  
 のせん出るとも茶人のお蔭ひある茶人  
 のゆゑその苦し言ふとじろく一記  
 於てぬるんはあつらんお物も年を喰  
 つてあつたに傳へしとくといふも昔年ある  
 別ちしん海のものも汚穢をへし一帯の  
 へんといふ誤つた名もよく採りて  
 うきもあつた。茶人とは其個は茶の因  
 へひあつた。葛芋を甘藷とて  
 を思へし其の子神とてなややくて  
 うの骨茶をこもて其を御うとて  
 のゆゑ量碑とていふもいふもあつた！  
 一はうのこのものよく製を片えら  
 此、其の大切なることをややくわつて  
 支那茶の植木の茶人とも茶の  
 支那茶の植木の茶人とも茶の

うついでに花をとりてとんとせいにねらうと母  
よりうごかすもさお目出ながらのありさう南  
唐のものの時勢を讀み得て共世のそよの  
のさきに感心しむ故言すまじき嘆息あり  
ひきかき

一時代前傳をむの跡英の内日方うめいと  
よこむをたよるこころのなきまじりて塗る  
ふくむいふやうのありけり更にはは  
高きまゝらんすむしあぐさ骨草なるめと  
ゆきしむ論をうたふは通文のりた

いふやうに十も一見しにのみよりのめ  
にたしむることと中を塗るうましむに  
んう大疵ひあるこころもそのひある  
にさうはかたきあはるまじきと評せる  
時のころくひのむしこころあつたしに  
かたき骨草のそよをたんとしむ  
塗るぬきにさう用ひに倍三倍位を扱  
しむにそのすまじきとすまじきと  
上をねらふ時のつらさをえんたものひ  
いがるはくのかたきもの又換お

ひあさ

一 一見くは是祖の(三)五姓をよまて述べらる  
 ひを清くあらむいふをよまては族(カ)らま  
 困るゝの(五)子受てまを(七)正の(九)年節  
 のある(三)姓同や天(五)平(七)年(九)の(三)姓(五)瓦(七)を  
 授(九)る(一)人の(三)あ(五)ら(七)ん(九)く(一)の(三)を(五)祖(七)の(九)成(一)立  
 一 一見(三)比(五)の(七)い(九)を(一)得(三)ら(五)う(七)と(九)そ(一)の(三)を(五)を  
 地(七)ひ(九)あ(一)ら(三)す(五)の(七)い(九)の

一 一昔(三)あ(五)れ(七)は(九)あ(一)ら(三)ん(五)く(七)く(九)飾(一)ら(三)ん(五)て(七)あ(九)ら(一)る(三)の(五)よ  
 入(七)り(九)ま(一)ち(三)は(五)あ(七)ら(九)ん(一)の(三)十(五)の(七)九(九)分(一)九(三)リ(五)ん(七)と(九)ら(一)し(三)て  
 冷(七)く(九)ら(一)る(三)の(五)い(七)の(九)い(一)ろ(三)ん(五)く(七)く(九)一(一)體(三)目(五)を(七)出(九)す(一)の(三)の(五)者  
 と(七)ら(九)も(一)無(三)い(五)由(七)来(九)ら(一)る(三)の(五)り(七)を(九)ま(一)す(三)る(五)く(七)く(九)只  
 一 一際(三)あ(五)ら(七)ん(九)く(一)ん(三)を(五)ま(七)入(九)ら(一)る(三)か(五)わ(七)せ(九)も(一)あ(三)ら(五)ぬ  
 せ(七)し(九)ら(一)る(三)ひ(五)あ(七)ら(九)う(一)が(三)ら(五)ん(七)く(九)て(一)高(三)直(五)を(七)授  
 の(五)ま(七)き(九)い(一)ろ(三)を(五)ま(七)つ(九)て(一)そ(三)と(五)一(七)體(九)形(一)を(三)ま(五)す  
 馬(七)鹿(九)く(一)く(三)い(五)氣(七)持(九)う(一)ま(三)う(五)く(七)く(九)今(一)全(三)体(五)を(七)以  
 の(五)連(七)中(九)一(一)と(三)大(五)部(七)分(九)を(一)不(三)あ(五)ら(七)る(九)の(一)と(三)謂(五)ふ  
 ハ(七)ら(九)け(一)の(三)成(五)ら(七)る(九)の(一)た(三)せ(五)ら(七)る(九)は(一)の(三)く(五)も(七)も(九)松  
 作(七)る(九)や(一)時(三)代(五)作(七)早(九)く(一)あ(三)ら(五)し(七)美(九)と(一)味(三)あ(五)ら(七)ぬ(九)か  
 ハ(七)あ(九)ら(一)ん(三)と(五)絶(七)對(九)し(一)結(三)け(五)を(七)た(九)る(一)う(三)く(五)い(七)ん(九)事

の連やうと花の山よ入るも花を漬つる  
こととわらぬと一般オウコトト新くさぬ  
あまのいのひあま

一尊せをもとえさるる人<sup>二</sup>女と選めよ<sup>一</sup>あねか

為人や新後才惚さむと一向指りて世に

容もゆめをさるる品よめとよる人と

世分りて雨吹らぬとてあて卑下りてう

骨董念もも客入るも雨吹らぬう極め

たまふいよ<sup>一</sup>何んむも長龍<sup>二</sup>る<sup>一</sup>といふむ

いふむ 汚るいのしと<sup>一</sup>新龍<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>いふ

いふむ 換り極むが<sup>一</sup>味をぬ<sup>二</sup>ぬ<sup>一</sup>もあ

龍<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>と<sup>二</sup>特ととと<sup>一</sup>ぬさるぬ<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>む

さむのぬさる<sup>一</sup>い<sup>二</sup>い<sup>一</sup>い<sup>二</sup>の<sup>一</sup>む<sup>二</sup>い<sup>一</sup>

い<sup>二</sup>味<sup>一</sup>も<sup>二</sup>奇龍<sup>一</sup>と<sup>二</sup>ぬ<sup>一</sup>る<sup>二</sup>が<sup>一</sup>其<sup>二</sup>味<sup>一</sup>

味<sup>二</sup>も<sup>一</sup>深<sup>二</sup>と<sup>一</sup>さ<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>さ<sup>二</sup>く<sup>一</sup>且<sup>二</sup>つ

深<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>さ<sup>二</sup>地<sup>一</sup>の<sup>二</sup>味<sup>一</sup>も<sup>二</sup>人<sup>一</sup>の<sup>二</sup>初<sup>一</sup>め<sup>二</sup>解

さ<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>さ<sup>二</sup>雨<sup>一</sup>吹<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>ぬ<sup>二</sup>ぬ<sup>一</sup>ぬ<sup>二</sup>ぬ<sup>一</sup>ぬ<sup>二</sup>ぬ<sup>一</sup>

所<sup>二</sup>ひ<sup>一</sup>さ<sup>二</sup>い<sup>一</sup>

一<sup>二</sup>地<sup>一</sup>は<sup>二</sup>も<sup>一</sup>り<sup>二</sup>ん<sup>一</sup>て<sup>二</sup>日<sup>一</sup>光<sup>二</sup>も<sup>一</sup>常<sup>二</sup>有<sup>一</sup>と<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>う<sup>二</sup>と<sup>一</sup>来<sup>二</sup>ぬ

い<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>よ<sup>二</sup>い<sup>一</sup>の<sup>二</sup>地<sup>一</sup>と<sup>二</sup>美<sup>一</sup>よ<sup>二</sup>是<sup>一</sup>と<sup>二</sup>早<sup>一</sup>い<sup>二</sup>

客をすくひ満して片を授ふを授ひある  
 今ある手くしり骨身を底に海つれと思ふ  
 とすべし買ひんて仕るゑふ、  
 リと心ある、  
 日く是を運ひんをくせりて来る、  
 よいせいのと一書載ある、  
 の手入海、  
 貴をさうくとく、  
 葉入於ちも物産家り、  
 とすの

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

東洋同業



東洋製

留覽室

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

東  
橋  
原  
製

